

# 佐伯史談

第六十二号

「郷土史研究」誌  
通算第八十四号

昭和四十九年三月十一日

## 佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稻垣字龍養寺 羽柴テ

研究

### 郷土の歴史を探る

(一) 東国武士の入国

会員 古藤田 太

平安末期に於いては、佐伯地方は勿論、豊後一円は既に祖母嶽大明神の後裔と称する大神氏へ豊前大神氏と區別されてゐる一族によつて支配されてゐた。或いは「大神氏に非ざれば——」と云つた風潮であつたかも知れない。其の分布は、大分川、大野川、豊後水道一帯は勿論、高千穂から五箇瀬川流域にかけて武威をふるつた大種族であつた。大野郡では、緒方氏、大野氏、三重氏。大分郡は阿高氏、種田氏、高田氏。直入郡は水原氏、速見郡は都甲氏、この主なる氏族は郷司、郡司となつたのち領主となるか、或は荘園の荘官から領主となつて地方の支配権をもちとり、更に大神一族と云う血族關係の連繫によつて結束を固めていた。

緒方氏（佐伯氏等三十七家）は文治二年（一一八六）緒方三郎が義経に加担して、頼朝に謀叛という失敗によつて没落、代つて大野氏が豊後武士団の棟梁的存在となつて

いた。この緒方三郎の没落は、大神氏一族に源氏の烈しさを教へ、大きな衝撃を与えたことであらう。宇佐八幡との關係をもつて以来、大神氏の歴史が如何に古く、永く又伝統あるものであつても、文治二年以来源頼朝の守護、地頭への配置政策に由り、豊後は一たび大友氏と謂う東国武士団の入国を迎えてからは、地方勢力の分布図は俄かに變つていつたことは論を俟たない。

#### 本号の内容

- 鎌倉幕府は、従末源氏と縁故の稀薄な奥州と西国は、幕府の基盤を成す東国武士を起用して、其の統制を固つた。九州を始め西国の所領所職の給与が画期的に拡大されたのは、承久の乱後であるが、勿論其の間も徐々に行われていた。九州の各所に守護職の配置が実施されたのは、随分とお

新見 郷土の歴史を探る（古藤田太）……一  
 (一) 東国武士の入国  
 新見 惟徳 春好の隆法について（佐藤哲也）……二  
 新見 佐伯基 高千穂小幡の沿革……七  
 (二) 別荘年間 (山本武雄)  
 便り 日向三州と佐伯（長谷川亨）……二  
 新見 佐伯と国木田歩（山本武雄）……五  
 (三) 尺間山  
 新見 佐伯名譽はとんぼ働きをしていざか……五  
 佐伯 龍 重要隆清指定の意義  
 新見 赤木村大木屋文吉の周辺……三  
 (四) 村のくらし（羽柴テ）  
 集會案内 貴物寄附拜受  
 委員会報告 領收報告  
 会費納入方依頼 寄贈圖書拜受

くれたように、それ迄は太宰府の二人の鎮西奉行によつて、九州一円は統轄され、大友能直の養父中原親能は其の一方奉行であつたが、正治元年(一一九五)始めて豊後の守護を兼ねるに至つた。

大友能直が、中原親能から豊後の守護職を譲られたのは建永元年(一一三六)頃と考へられている。高嶺山に据つて反抗した大神一族の阿高次郎、鶴ヶ城に反旗をひるがえした涌次郎家親、豊後武士団の首謀大野九郎泰基は、大野町の神角山に抗戦し、其の叛乱は全九州の軍勢が催され左程の激戦で、遂に大野泰基は自及した。最近肥前の石志文書の発見によつて、神角山の合戦は史実として確認されるに至つた。

この一連の事件は、大友氏入国以前のことではあつたが、大神一族の衰亡を告げるものであつた。しかも鎮西奉行中原親能(入道殿忠)によつて討伐をうけたものである。従来謂われて来た大友氏の入国に抗戦したもので無いようだ。叛乱の動機は邪逆にあつたものであろうか。御上吏の物亦有る点である。建永(一一三六)以降から大友能直の代官古莊氏等は坂東武者を引き連れて、はるばると豊後に入国して来た。

豊後の何処の民衆にとつてもそれは驚天動地の大事件であつた。大神一族のさしたる抵抗はなく、靜かなる入国であつたに違ひない。寧ろ大神一族の少数の軍兵は、東国武士を鎌倉に迎え、案内の役を果したつてはあつたまいか。

大友惣領家は第三代頼泰の頃になつて蒙古の襲来があり、幕命に基き豊後に下向、大友殿子家はこれより早く承久の乱後、大野莊其他名寄の地に入国土着したものとされてゐる。民衆は始めて東国武士に接し、交渉をもつ、ここに新なる收奪者を迎えた。彼等民衆の眼に騎馬や弓

に長じた坂東武者の姿はいかに映じたものであろうか。

この頃のものであろうか、広島県新庄の田植草紙に、  
は(坂東)とう(旗)の原は、弓は上手なるもの  
(堂) さらしたつ馬をいとおといたり

さても上手や、さらもふる (馬) 弓をわといたり  
おがいの(殿)か、かけ鳥いたるゆ又手は  
さてもい(射)のふ、見ことや、弓の寸かたは

この外中世歌謡の中には、恋歌や、讚美され憧憬の的となる坂東武者を歌つたものが多く残つてゐる。

東国武士、大友氏族の西遷と定住は、地方にいかなる影響と感化を与えたであらうか。この地方と鎌倉との交通は年と共に頻繁になつていつた。この交通は京文化、鎌倉文化と運び、地方の経済文化の発達を促すことになつた。民衆は漸に鎌倉、坂東と謂はるる大役を強制されて鎌倉と往復し、武士に扈從して太宰府、博多への旅も頻繁になつた。これは民衆に広い視野を与えたことであらう。

今日、我々の身近な処にも、八幡神や熊野神と祀る神祇や祠がある。其の数は夥しいものに相違ない。人の移動は神の移動を伴う。かつて東国武士は源氏の氏神であり、武神である八幡神と、古くから東国武家社会に奉遷した熊野神と祀る習慣があつた。大分市滝尾津守(津守莊)は熊野社の所領で燈油田であつたが、大友氏以て代これを保護し続けたようである。(大友史料) また大野郡深山神社文書によると、大友能直は神官を鎌倉に呼び、祭祀の規式を伝習させてゐる。吾妻鏡にもこうした空気が当時の鎌倉にあつたことが説かれてゐるが、神社

祭礼の古い淵源を知る事が出来る。

禪は武士の倫理と似通つた一面ともつたかには、臨濟宗は鎌倉幕府の保護の下に、曹洞宗は地方武士の信仰のもとに発展した。旧仏教寺院で禪宗に転宗したり、禪寺に乘取られたりしたことが指摘されてゐるが、大分県地方史三八一四の号に、禪宗の地方発展に尽した末嗣武士の比重は相当に高いとされてゐる。宗派をえ判らぬ佐田市の服や古市の今は無き古き寺々。郷土史の探るべきところは余りに多い。

宗教、信仰以外に生活慣習、言語、風俗などの生活文化も、もろ／＼の文化も西遷して在来文化と交流していつたてあるう。今日我々の見る事々出来る石造遺物の多くは、鎌倉期以降のものである。名も無く暮むし左多くの五輪塔、供養塔は、ここ大神氏の天地に、新しい文化を伝えた坂東武者の眠る姿であるうか。

(住所 南海郡那蘇末所江良)

研究

惟治、春好の魔法について

会員 佐 脇 貫 一

惟治、山上寺の住僧春好を師匠にて、魔法を行はるべき契約有て、上十五日は清淨潔斎の身となり、魔法に他念なく心を入らる。法のしるし神変奇特ありて、打ては響き、呼ば答ふ。身に随ふ影人如し、何事も心に叶はずと云事なし、累代相伝の家老、此儀を更に悦ばず、魔法の恐れを嫌き、唯尋常の御信心計こそ然るべく候へと、幾度も諫申すに一度、御承

引もなく、日に益し月に重り、魔法に心を入らるるこそ末おそしけれ。(大友時盛記)

大魔法は能修得時日幸自由を儲け、衆に修むせむ時は高き求む土の力なり。ある時惟治禪て、法に即近穢れたる仔細あり、其上は猪肉を食すべき由宣ふ。春好申さるるは、是はためしなき仰か有、髪を剃り衣を帯せしより以来持戒し、潔斎の身にて御座候、今更破戒せんこと御有免服へ。其上数年相伝中假法も、徒に罷成候はんと再三申さるるにも、惟治同せられず、刀をぬき咽喉に差立て食すべきと攻て殺されず。春好亦永家中の僧なれば叶はず、さらば御意に随ひ肉食せんと、左之極之と思ひ鹿へしし、肉を食す。撃てかたもつべき、即座に吐血してけり。衆へ後に深田八郎兵衛尉を討手に給はり、春好を生害せらる。(大友時盛記)

寔に山上寺の住僧春好と云ふ行徳、外法を兼備し、衆に空を翔る鳥も落し、野に走る獸を呼逐す通方自在の法印、是聞くと怪をなす。いかなる因縁にや、惟治公聞及ばれば使者を遣し、何となく帰俗せらるるこそうたてけれ。(御筆礼実録)

新殿を作り立て、春好は与へけれは、威光日増に又十倍し、益々積徳し、自(明)十日清淨の水と没し、潔斎の精進ある時もあり。黒月七八食を断ち、又は火の穢を忌む(守戒)されば春好が體上條法、惟治公へ外見たるものなし。然るに殿中の度塵とはく下郎の首、或時、板の罅穴より壇上の次第を透見しけるに、本尊は其色赤き事燃る火の如し。形体は